

クロスロードのデザイン

Style and Design for CROSSROAD

所 洋 介*
Yosuke TOKORO

石 橋 丈 弘*
Takehiro ISHIBASHI

要 旨

クロスロードは「Active Life Navigator」というコンセプトのもとに SUV の持つたくましさをベースに3列シート(7人乗り)とコンパクトなサイズをあわせ持った新生活創造車として開発された。

エクステリアデザインは、「小さいけれども強い」をテーマに都市で埋没しない個性的なデザインを目指し、張りのある四角いボデーとしっかりと張り出したフェンダをつくり力強いデザインを実現している。

インテリアデザインは「爽快で骨太な空間」をテーマにスクエアな室内を隅々までつくりこみ骨太な骨格をいかすことによって、守られた安心感とタフでモダンな空間づくりを目指した。

タフで力強い雰囲気をもつエクステリアとモダンなインテリアをあわせ持つこの車が新しい価値観を人々に提供できると考えている。

ABSTRACT

The CROSSROAD was developed based on the concept of “Active Life Navigator.” It combines a compact body with the ruggedness of a 3-row, 7-seater SUV to accommodate new driver lifestyles.

Based on the idea of “small but tough,” the vehicle’s individual design stands out even in the city. CROSSROAD expresses a tough image through its solid, angular lines and prominent fender.

Every corner of the CROSSROAD’s interior has been refined with the concept of “Exhilarating and Brawny,” complimenting the vehicle’s angular body, while its sturdy frame and modern, robust interior were created to provide passengers with a sense of security and safety.

With the CROSSROAD’s tough exterior and modern interior, we hope to provide vehicle owners with new value in their automobiles.

1. はじめに

クロスロードは新しい価値観をお客様に提供すべく日本市場のために開発された。人々の価値観も多種多様で市場にもさまざまな車があふれている。その中においてひとつのユーザ動向に注目した。インターネット、パソコンゲームに代表されるような仮想空間で楽しむことからやはり体を動かし五感を使って楽しんでいく、そのような動向が時代の変化とともに新しい兆候として生まれてきている。それは興味関心が自分自身にむいて、楽しみながら素の自分を磨いて、自分の世界を広げていきたいというマインドが人々に大切にされつつある。

また一方では、自分だけでなく家族や友達、恋人といったまわりの人たちと楽しみを共有していきたいと考えている人たちが増えているというものである。

これらを受け開発チームは、等身大の生活の中で無理なく受け入れられる取り回しの良いサイズを持ちながら自分のライフスタイルをつくっていく車ができないだろうかと考え、日常生活で多人数乗車で使える3列シートを備え、スタイルは趣味性を主張するSUVで、何かやれそう、始めたいというワクワク感を持たせたいと考えた。

デザインはコンパクトなサイズながら、しっかりと個性を主張していき、都市で埋没しない車を目指した。存在感のある外観、室内空間の可能性を高次元でバランスさせながら、オーナーの所有欲を満たし、長く飽きのこない形態を目指した。

我々はこうした方々にむけて、生活の幅を大きく広げ、クールでタフなデザインとともに粹にはまらない可能性を広げていく車を目指し、「Active Life Navigator」というコンセプトのもとに開発をスタートさせた(Fig. 1)。

Fig. 2 に最終デザインモックアップを示す。

*四輪開発センター



Fig. 1 Concept of Crossroad



Fig. 2 Final design mock-up

2. パッケージレイアウト

Fig. 3 にパッケージレイアウト図を示す。

日常での使いやすさとして重要な“取り回しの良いサイズ”と、“皆で楽しい3列多人数乗車”の両立がパッケージのキーとなる。

市場に広く受け入れられた初代 CR-V よりも 100mm 短い全長を適切なサイズと定め、その中に3列7人乗りを実現させた。1列目、2列目はAM95%(アメリカ人男性体型の95%をカバーする寸法)のダミーが乗れる寸法をとり、大人4人がゆったりと座れる空間を実現し、3列目は使用状況を考えて、小柄な人が無理なく座れる寸法として JM50%(日本人男性体型の50%をカバーする寸法)のダミーが乗れる寸法に割り切った。

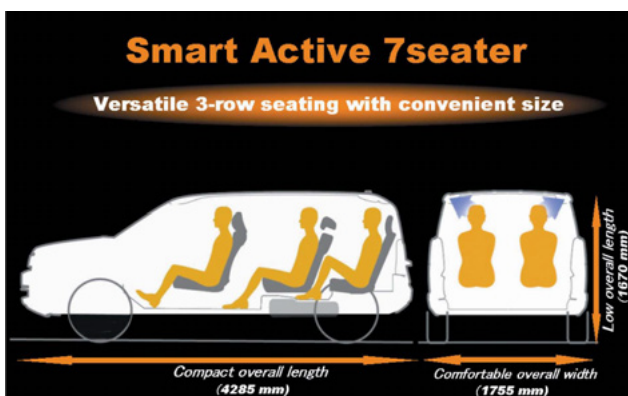


Fig. 3 Concept of package layout

STREAMとあわせて開発したプラットフォームの低床技術とスぺアタイヤレス化により、低い全高、コンパクトなサイズの中に3列7人乗りが可能となった。また、スクエアなデザインとすることにより、頭上の横方向の広さはステップワゴン同等となり、実際に座るとサイズ以上に空間寸法を感じるキャビンスペースとなっている。

全幅は STREAM よりも 60mm 広げている。大径タイヤと相まって、SUV らしい力強い骨格を実現した。

3. エクステリアデザイン

エクステリアデザインのコンセプトは「小」さいけれども「強」い。日常生活の中で扱いやすいサイズでありながら、SUV としていかに存在感をだしていくか、これがまずデザインの大きなテーマである。市場にはありとあらゆるコンセプト、デザインを持った車があふれており、その中において新しく市場を切り開いていくには、個性を持ったひと目でわかる存在感あるデザインが必要と考えた。

通常、車のデザインはクレイをもったり、削ったりしながら塑像的なやり方で造形していくが、この車はまずはディテールにとらわれずに全体のプロポーションを大きくとらえ、ひとつの塊から削り出していくイメージをもって骨格作りをおこなった。

そこで彫刻家が素材の塊から完成形を想像しながら1回限りで形をつくりだしていく強さをモチーフとして造形のテーマを、「スカルプチュアルタフ フォーム」とした(Fig. 4)。

実際にはパッケージレイアウトに有利なスクエアな形態をモチーフに、フェンダが張り出し、車幅のワイド感とSUVらしさを強調している。

サイドパネルをフロントからリヤ、ルーフからタイヤにかけ絞りこみ、面に緊張感ある張りを持たせている〔Fig. 5(a), (b)〕。

サイドビューにおいては、コンパクトなボデーを支える大径タイヤで下半身をしっかり見せ、またベルトラインを高めに設定し、ウインドウを横長に見せ、実際の寸法より車

著作権上の理由により非表示

Fig. 4 Concept of exterior

を大きく見せている。ウィンドウ面は一段奥めて鉄板の厚み感を表現し、タフな印象を持たせた(Fig. 6)。

フロントビューにおいてはワイドで精悍な顔つきを目指し、サイドパネルの絞り込みとのバランスと2段バンパを採用し、それを実現している。

リヤビューはルーフにむけて絞りこんだガラスと縦型リヤコンビを採用し、Dピラーを細く見せ、3列目の存在を感じさせないようにしている。

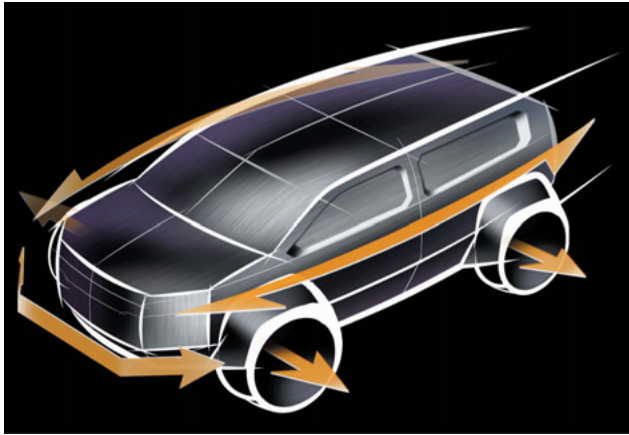


Fig. 5(a) Beveled side panel and pendent fender



Fig. 5(b) Beveled rear-end



Fig. 6 Underbody concept and deep beveled window frame

4. インテリアデザイン

インテリアデザインのコンセプトは「爽快×骨太」。

乗る人に気持ち良く感じてもらうために、広々とした爽快な空間であること、また SUV に乗っている気持ち良さ、安心感を感じてもらうために頑丈で骨太な空間であること、という二つの価値の融合を目指した(Fig. 7)。

まず爽快空間を実現するために着目したのはエクステリアのスクエアなフォルムの良さをインテリアに生かすことである。

室内を隅々まで、徹底的に四角く造り込むことによって空間を広く取り、“スクエア”感を強調することでクロスロードならではの爽快空間を実現した。

そして、その空間に守られる安心感をもたらすために着目したのは、建築の“柱”のイメージである。強度を確保するための柱や梁をあえて剥き出しにしてデザインされた建築を時折見かけるが、そんな空間の安心感をイメージした。

インストルメントパネルの基本造形を太い断面を持った横基調のデザインとし、スクエアな空間を支える大黒柱のイメージにした。またピラーやフロアを隅々まで四角く骨太にデザインすることにより、「爽快×骨太」インテリアを実現した(Fig. 8)。

デザインテーマのディテールは力強さがありながら、洗練されている「タフ・モダン」を造形テーマとして開発を進めた。



Fig. 7 Final design of instrument panel

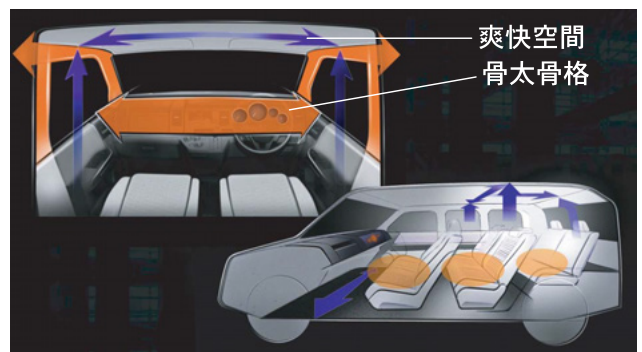


Fig. 8 Tough modern interior

インストルメントパネル廻りの操作系は直感的な視認性、操作性を重視した機能的で力強い形状としている。

特にエアコンの操作パネルはシンプルでわかりやすい3連ダイヤルタイプを採用し、円の大きさに主従関係を持たせ、瞬時に機能がわかるように配慮した。また、形状の大小にリズムをもたせた見やすくかつエモーショナルな独立4眼メータを中心としたコクピットデザインにすることにより、SUVを操る高揚感を演出している(Fig. 9)。

エクステリアのテーマをインテリアでも採用することによりクルマ全体でのデザインの統一感を目指した。

“スカulptチャル・タフ・フォルム”という金属の塊から削りだしたような造形をインテリアでも随所に意識し、力強さを表現した(Fig. 10)。

シートアレンジはワンタッチと簡単操作をテーマにシンプルにし、快適性というシート本来の機能を重視した。



Fig. 9 Tough modern cockpit



Fig. 10 Convenient functionality that carved from solid block of metal

5. カラーデザイン

5.1. エクステリアカラー

エクステリアデザインの持つ力強い塊感を表現するのに、金属の持つクール感、ガラスを多用したビルなどに見られ

る透明感をモチーフに都会的で洗練された色を目指した。

その中でもアトランティックブルーグレーメタリックは、新色としてこの車の面の張りやソリッド感を強調するために粗いアルミフレックと透明感あるブルーグリーンを組み合わせ、大きな一つの面でできているサイドパネルの表情を豊かに見せている。

他の色は既存色を中心に、粒径の粗いブラック、モダンに見せるパールホワイトなど有彩色も用意し、車をいろいろな表情に見せている(Fig. 11)。

5.2. インテリアカラー

インテリアカラーのコンセプトは「タフ・モダン」と定め、力強さを持ちながら洗練された都会的な空間を目指した。精悍なブラックを基調としたダーク内装と、クリーンなチタンアイボリーを基調とした明るい内装の二つを用意した(Fig. 12)。

著作権上の理由により非表示

Fig. 11 Concept of exterior color

著作権上の理由により非表示

Fig. 12 Concept of interior color

ダーク内装はブラックが基調でありながら、少し青味を感じさせるファブリックを採用することにより、単純ではない豊かな空間を演出している (Fig. 13)。

チタンアイボリーの明るい内装は、ブラックとのコントラストにより、爽快で都会的な空間を演出した。

人が触れるところは優しい明るい色にしなが、荷室廻りは汚れても気にならないブラックにし、SUVらしいタフで機能的な配色にしている。

また、立体的な造形部に高輝度の金属調の加飾を施すことにより、力強さを強調しながら、華やかで、上質な空間を表現した (Fig. 14)。

5.3. ファブリック

ファブリックも「タフ・モダン」をテーマに力強さを持ちながら、洗練された快適性を目指した。凹凸感の強いデザインとすることで力強さを表現し、室内全体の基調に合わせたボーダパターンにより統一感を持たせ、シートを広く大きく見せている。また、水平・垂直方向に直線を通さない工夫をし、デザイン線が傾いても気にならない生産性のあるデザインとしている (Fig. 15)。

凹凸の立体感、厚みのあるラミネートを施した上でヒートエンボス加工をおこなうことで実現している。フロントシートはさらに10mm厚の低密度のラミネートを重ねてからシートに張り込むことにより、力強い素材感でありながら、柔らかくて優しい触感を持たせた (Fig. 16)。さら

にユーテリティーパッケージでは撥水加工を施し、SUVとしてのアクティブに使える配慮もしている。

人に触れるシートは柔らかくたっぷりとした形状とすることで快適な安心感を表現している。フロントシート表皮のウレタン層(ラミネート厚)をSTREAMが5mmなのに対し、倍の10mmの厚みを持たせることにより、初期のタッチは柔らかいが、沈み込むとしっかりとホールドする「ピッタリ・フカフカ」シートを実現している。シートアレンジはワンタッチと簡単操作をテーマにシンプルにし、快適性というシート本来の機能を重視した。

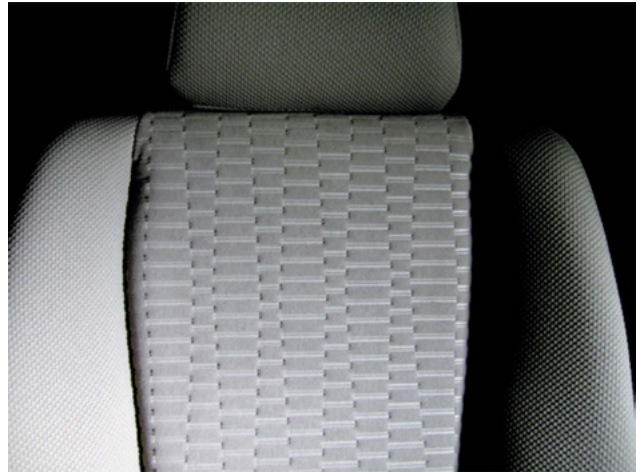


Fig. 15 Striped pattern

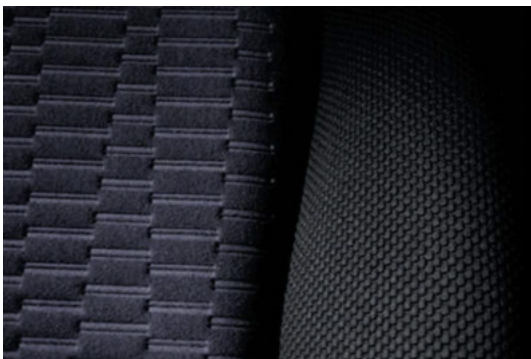


Fig. 13 Fabric with bluish coloring



Fig. 14 Metallic decoration



Fig. 16 Cube representation raminating and embossing

6. ロゴタイプ

CROSSROADは文字数で9文字あり、一字、一字を認識しにくいので、全体を塊で見せるようアイコン化した。頭文



Fig. 17 Logo design of Crossroad

字Cを月に、他の文字をビルにみたてて、ビル群にかかる月という都会の風景をモチーフとした。その風景のように頭文字Cを月のように丸くし、四角をベースとした8文字とはキャラクターを変えることで全体を印象づけるようにした(Fig. 17)。

7. おわりに

コンパクトなのに所有欲を満たすデザインとはどのような形態なのか。エクステリアはクールでタフをテーマにしたキュービックをモチーフにした新しい形態の提案、インテリアは爽快で安心感ある空間を達成し、その空間に7人乗りを実現した新しい車である。「Active Life Navigator」をコンセプトに新機種のこの車の特徴を際立たせるために議論を何回も繰り返してきた。そういった思いを払拭してくれたのが、無理なく自分の世界を広げていくという考え方だった。クロスロードは大きさや経済力を誇示する車ではない。SUVの形態が丸みを帯びていくトレンドの中で既成概念から離れた視点からの発想がこの車の形態を生み出したのだと考えている。

加えてこだわったのは、訴求段階において、車のコンセプトとデザインを理解してもらうために、クロスロードが似合うシーン、ユーザをイメージしてストーリーをつくった。これは実際のコマーシャルづくりにも影響を与えた。デザイン、室内空間の可能性、取り回しのよさ、走りがきっとお客様の心をとらえ、所有すればこの車が持つ楽しさの広がりとう共有という考えを深く理解してくれると考えている。クロスロードが人々の新しいライフスタイルをつくっていくパートナーでありたいと願っている。

■ 著 者 ■



所 洋 介



石 橋 丈 弘